

11 図書館および図書・電子媒体等

【到達目標】

図書館は、本学における学習、教育および研究活動を支援することを目標としている。そのために必要かつ充分な学術資料を収集しているか、利用者がそれら資料を充分に利用できる環境が整備されているか、利用者と資料を結びつけることができる図書館員がサービスに従事しているか、が問われることとなる。

本学図書館の具体的な到達目標は以下のとおりである。

1. 資料の充実

学部、大学院の教育および研究活動に必要な図書、学術雑誌、新聞、そして各種オンラインデータベースを含む電子媒体の資料を収集し、充実を図る。資料の選定・収集の基本方針は、本学創立の理念と目的ならびに教育目標に沿ったものとする。

2. 施設・設備の整備

学生数に見合った閲覧席数を確保し、利用しやすい資料配置を工夫するとともに各種設備の充実を図る。

3. 利用者サービスの向上と図書館利用の促進

- ・授業終了後も充分に図書館を利用できる時間と環境を提供する。
- ・レファレンス・サービスを充実させ、学生の情報リテラシー能力を高める。
- ・図書館ホームページのコンテンツを充実させ、図書館および資料の利用促進を図る。

1. 図書、図書館の整備

1)図書、学術雑誌、視聴覚資料その他研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性

【現状説明】

(1) 図書

図書館の所蔵資料数は、2009年3月末現在、356,515冊（和図書186,858冊、洋図書169,657冊）の図書(図表11-1)と、和雑誌2,700種、洋雑誌1,061種、和洋新聞36種である。うち約33.8万冊以上の図書と学術雑誌、新聞が閲覧室および開架書庫内に配置されており、利用者は自由に資料にアクセスすることができる。過去3年間の図書受入冊数は、2006年度9,679冊、2007年度9,992冊、2008年度10,269冊である。

図表11-1 分類別蔵書数および蔵書総数 (2009年3月31日現在)

NDC(日本十進分類法)	和書	洋書	合計	構成比(%)
0(総記)	25,923	8,239	34,162	9.58
1(哲学・心理学・宗教)	10,991	7,124	18,115	5.08
2(歴史)	21,121	16,454	37,575	10.54

3(社会科学)	54,894	32,826	87,720	24.61
4(自然科学)	21,517	26,343	47,860	13.42
5(工学・工業)	3,993	715	4,708	1.32
6(産業)	3,320	1,316	4,636	1.30
7(芸術)	6,569	3,929	10,498	2.94
8(語学)	10,728	20,350	31,078	8.72
9(文学)	27,802	52,361	80,163	22.49
合 計	186,858	169,657	356,515	100.00

図書資料の整備に関しては、本学の教育目標を達成するために教育・研究活動の動向を考慮する一方で、「高い専門性を習得させるとともに、広い教養を身につけさせる」という創立の理念と目標に留意し、専門分野における学生用、研究用図書の充実に配慮しつつ、蔵書構成上著しくバランスを欠くことのないよう、各分野の基本図書の整備にも重点を置いている。研究用図書は各学科の選定によるが、図書館と教員を中心に行なわれている学生用図書の選定はおもに次の各項に基づいている。

- ・英語と英語教育、英学史関連の図書
- ・授業関連分野の図書
- ・シラバスに示された参考文献
- ・教員からの学生用推薦図書
- ・学部学生、大学院生からの購入希望図書
- ・レファレンス業務を通じて不足していると認められた分野の図書
- ・女性学関係図書
- ・本学の歴史および創立者に関連した図書

特色あるコレクションとして、英米文学、言語学、アメリカおよびヨーロッパの社会・歴史、女性問題に関する資料、19世紀イギリス関係資料の収集にも重点を置いている。

また、1、2年次の英語教育改革の第一弾として2008年度より英文学科、国際関係学科の必修科目となった“Extensive Reading I”の授業のために拡充されたCollectionには、2009年5月1日現在1200冊以上を所蔵している。従来、ハーツホンホール内2教室に収容されていた洋書のタイトルをさらに充実させ、学生のアクセスに配慮して増設した図書館1階オープンスペースの専用書架に移動し、午後9時まで利用することを可能としている。

そのほかに、毎年、各学科交代で文部科学省の私立大学等研究設備整備費等補助金「特定図書」を申請し、本学の研究分野にとって重要なだけでなく他大学の研究にも資するところの大きい特色ある資料群の整備に努力している。

2007年度には『農業雑誌』（古書）を購入した。この資料は、本学創立者津田梅子の父、津田仙が創刊した明治期の学術雑誌原本で、農業だけに止まらない広範囲な内容を含んでおり、当時の日本の文化・社会・政治および科学を研究する上で貴重な資

料であるとともに、国会図書館でも欠号となっているかなりの部分が揃ったコレクションである。

同様に、2008年度には“Collection of Media and Cultural Representation in Modern Societies”（現代におけるメディアと文化表象研究コレクション）として、洋書239点からなる資料を購入した。主としてメディアスタディーズ・コース関連の映画・ジャーナリズム・メディア全般の歴史、文化変遷、およびジェンダーやマイノリティの表象をはじめとする基本文献から、大学院レベルの研究に役立つ分析、批評・批判理論に関する文献、ドキュメンタリーおよびジャンル映画の歴史と表現技法に関する専門文献までを包含している。日本におけるこの分野の研究がいまだに初期段階に止まっているため、海外の資料を網羅的に収集することには大きな意味があると同時に、国内の他の研究機関においてもまとまった蔵書が少ないとことから、『農業雑誌』同様、学外の研究者に資するところも大きいと考えている。

(2) 学術雑誌

全所蔵タイトルの28%は英語を中心とする外国語の雑誌であり、購読雑誌の分野別割合は、人文科学系33%、社会科学系40%、数学系8%、情報系5%、医学・保健科学系5%、レファレンス等総記9%となっており、学科の教育・研究に対応したバランスのよい構成となっている。

学術雑誌の購読は、各学科の要望を基本とし、それに学生の要望等を加味して選定しているが、継続の可否および新規タイトル決定については、毎年1回、図書館から各学科に見直しを依頼し、整備に努めている。雑誌は、数学関連の洋雑誌を除き、図書と同様、図書館本館の開架書庫内に配架されており、利用者は自由にアクセスすることができる。

(3) オンライン・データベース

2009年に利用契約を結んでいるデータベース・タイトルは下記のとおりである。

- | | |
|------------|--|
| 記事索引・抄録ほか | <ul style="list-style-type: none"> • Wilson Humanities Index • Wilson Readers' Guide to Periodical Literature • Eric(Educational Resources Information Center) • Social Services Abstracts • Linguistics and Language Behavior Abstracts (LLBA) • MathSciNet(Mathematical Reviews on the Web) • 医学中央雑誌（医中誌Web） • DI-Law.com（法情報総合データベース） |
| オンラインジャーナル | <ul style="list-style-type: none"> • ACM (Association for Computing Machinery) Portal • JSTOR • LexisNexis Academic • Literature Online • SpringerLink |

- ・日経BP記事検索サービス・大学版
- ・朝日新聞・蔵（DNA）

その他オンライン辞典 　・Oxford English Dictionary

オンライン・データベース利用のための予算は、2006年度に前年までの450万円から680万円に増額されてから、2007年度770万円、2008年度800万円、そして2009年度も前年比110%の880万円が措置されている。2006年度に契約タイトルを全面的に見直し、大幅な入替を行なった結果、索引・抄録データベースだけでなく、学術論文および記事情報をフルテキストで読むことができるオンライン・ジャーナルの契約タイトルが追加され、冊子体では購読していない学術雑誌を補うことが可能となった。そのほか、冊子体で購読している雑誌に付属する電子ジャーナルの利用登録を進めており、フルテキストの雑誌論文タイトルをオンラインで入手できる手段が広がっている。

(4) 視聴覚資料（AVライブラリー）

AVライブラリーでは、英語を中心とする語学教育の支援を主たる目的として、2009年3月末現在、約60言語、約10,000本のオーディオ資料、7,800本以上のビジュアル資料、および約6300冊の付属テキストを所蔵している（図表11-2, 11-3）。メディアの変化に対応する措置として、レーザーディスク（LD）で所蔵しているタイトルのうち利用頻度の高いものから優先的にDVDを購入し、入れ替えを図っている。

資料の選定・購入にあたっては、授業関連資料を中心とする各学科の意見・要望を基本としているが、学生の要望にも充分配慮するため、資料購入希望制度によってニーズの把握に努めている。

図表11-2 メディア別視聴覚資料所蔵数（2009年3月31日現在）

メディア	資料数
テキスト	6,340
VCD	2
DVD	2,905
ビデオ・カセット	5,710
CD	3,486
LD	378
オーディオ・カセット	6,427
CD-ROM	24
合　計	25,272

図表11-3 分類別視聴覚資料所蔵数

分類名		Audio	Visual	Text	合計
総記	000	1,365	111	756	2,232
語学・言語学	100	127	51	44	222
英語	110	2,475	622	1,906	5,003
フランス語	120	894	128	589	1,611
ドイツ語	130	509	166	454	1,129
スペイン語	140	241	99	187	527
中国語	150	484	51	297	832
ロシア語	160	122	34	62	218
韓国・朝鮮語	170	218	1	136	355
日本語	180	141	52	94	287
その他の言語	190	511	45	290	846
文学	200		129	75	204
英米文学	210	1,084	160	314	1,558
フランス文学	220	169	5	38	212
ドイツ文学	230	51	7	25	83
スペイン文学	240	15		10	25
中国文学	250	106	10	19	135
ロシア文学	260	43	3	9	55
韓国・朝鮮文学	270		10		10
日本文学	280	11	20	2	33
その他	290	1	5	5	11
社会科学	300	161	1,312	224	1,697
自然科学	400	4	208	8	220
保険・健康教育/心理学/哲学・宗教	500	37	490	51	578
教育	600	266	257	443	966
芸術	700	887	314	89	1,290
映画・演劇	800	2	4,713	218	4,933
合計		9,924	9,003	6,345	25,272

【点検・評価】

研究所等一部に複本として別置されている図書と数学分野の資料を除き、図書館本館（中央図書館）への資料の集中配置と複本購入の抑制に全学の教員が協力し、限られた予算のなかで多様な資料を効率的に整備する努力をしている。

本学は、英文学科、国際関係学科ともに、研究方法が社会科学、人文科学両分野にわたることを特徴としているうえ、数学科・情報科学科・情報数理科学科が研究対象とする自然科学にも配慮が必要である。一方、学生は、「高い専門性を習得させる」という教育目標に基づく教員の指導によって、2年生ともなると専門的な資料を要求する度合いが高くなってくるため、比較的小規模な大学であるにもかかわらず、多くの学問分野にわたって最新資料から歴史的資料まで、あるいは基本図書から研究用図書まで幅広く収集整備することが要請されることとなり、予算あるいは施設・設備の制約上、利用者の要求に充分応えるには限界がある。さらに、近年の洋雑誌価格の高騰は学科図書費を圧迫し、教育・研究に必要な学術資料の整備を妨げる大きな要因となっている。

また、新コースのうち特にメディアスタディーズ・コースが対象とする芸術部門の所蔵資料数が少ないため、資料の充実に努めているが、学術研究・実証研究の裏付けともなる歴史的資料の中にはすでに冊子体での入手が困難なものも多い。

【改善方策】

多岐に渡る学問分野の資料を充実させるために、和書については、1997年より2009年に至るまで毎年500万円の特別予算措置が講じられ、社会科学全般、歴史・宗教・哲学等の人文科学、女性問題および現代社会事象に即した分野について、新刊図書を中心に選定を行ない、その充実に努めている。また、多文化・国際協力、メディアスタディーズの両新コース関連図書についてもこの特別予算のなかで重点的に選書し、充実に努めている。

また、大学院生用の洋書購入のために特別措置されていた年間予算が、2004年度に50万円から100万円に増額され、その後2009年度まで継続して措置されていることによって、専門分野の高額資料購入の可能性が広がり、研究環境の向上に繋がっている。

外国雑誌の講読および外国語の継続受入（シリーズ）図書については、複数の納入業者から定期的に見積りを取り、取次先の見直しを行なって納入価格の上昇を抑えるよう、また、オンライン・データベースの利用にあたっては、PULC等のコンソーシアムに参加し、他大学と協力して価格を下げるよう努力している。

新コースであるメディアスタディーズ関連の歴史的資料の整備については、マイクロフィルム・マイクロフィッシュで補う計画を立て、2006年度からコレクションの購入を開始した。また、DVDを中心とする視聴覚資料充実のためには別途予算が措置されている。

2) 利用環境の整備状況とその適切性

A. 図書館

【現状説明】

図書館本館は丹下健三の設計により、1954年に建てられた。その後1980年に旧書庫、2000年に新閲覧室および新書庫の増築を実施し、2009年5月1日現在、書庫の収容可能冊数は約53万冊となっている。また、増築部分は、車椅子用スロープ、エレベーター、身障者用トイレの設置など、障害者に充分配慮した設計である。さらに、2008年2月～3月に新書庫5階の改修を実施した結果、閲覧席数は450席から498席に増加し、学生収容定員に対する割合は20%を超えていている。閲覧室には、並列型の机とともに個別ブース型の閲覧机も設置し、書架の増設による収蔵機能の拡充とあわせて、利用環境の改善を図っている。

館内は、貴重本室、個人文庫、マイクロ資料保管庫などの一部を除き、書庫を含めた全館が開架式となっており、利用者は所蔵資料を自由に手に取って利用することができる。あわせて、1階閲覧室だけでなく2階～4階までの書庫各階に利用者用端末を複数配置し、書庫内でも資料の探索が容易になるよう配慮している。

資料の配置に関しては、2000年4月の書庫増築を機に、それまで旧書庫5階に位置していた学術雑誌および大学紀要類を開架書庫1～2階へ、また閉架書庫内にあった新聞のバックナンバーを開架書庫へそれぞれ移動したことによって、学生および教員、研究者の利便性の向上を図った。さらに、最新の学術雑誌情報へのアクセスを容易にするため、1階閲覧室にカレント雑誌コーナーを新設した。なお、正面入口には1996年よりBDS(Book Detection System)を導入し、資料の紛失防止の効果を上げている。

- | | | |
|----------|-------|--|
| (1) 開館時間 | 授業期間中 | [月～金] 8：40～21：00 (貸出は20：30まで)
[土曜日] 8：40～16：30 (貸出は16：00まで) |
| | 授業期間外 | [月～金] 9：00～16：30 (貸出は16：00まで) |

後述する平日時間外閲覧業務の外部委託を期に、土曜日の開館時間を午後3時30分から4時30分へと延長することができた。なお、月曜日から金曜日までの授業終了時刻は5限目の17:50、土曜日には授業は行なわれていない。

(2) 貸出冊数・期間

	貸出冊数	貸出期間
学部学生	無制限	4週間
大学院生		
聴講生		
卒業生	5 冊	4週間
TAC・EUIJ・EUSI	5 冊	2週間
他大学ほか外部利用者	3 冊	2週間

* 春期、夏期、冬期休暇に際しては長期貸出を実施している。

(3) 利用状況

過去5年間の月別の利用者数は図表11-4のとおりである。2005年度の入館者数は前年に比べてかなり減少したが、2006年度以降再び増加する兆しが見えている。夏期・春期休暇期間を除く授業期間中は、月平均延べ約17,000人、1日平均延べ750人以上の利用があり、図書館は学生、教職員によく利用されている。

2006年4月より書庫の利用時間を従来の午後6時15分から午後8時まで延長するとともに、自動貸出装置2台を導入することによって、貸出時間も午後8時30分まで延長し、利用者サービスの向上を図った結果、5限目の授業（16：20～17：50）に影響することなく図書貸出手続きおよび書庫利用ができるようになったため、利用者からは好評をもって受け入れられている。

過去5年間の年間貸出冊数平均68,700冊以上という数値は、単純に在学生ひとりあたりに換算しても23冊前後となり、私立大学連盟参加大学の平均貸出冊数を大きく上回っている（図表11-5）。また、オリエンテーションには年間500人前後の学生が参加している。

図表 11-4 月別開館日数・入館者数状況（延べ人数） （）内 = 開館日数

	2004	2005	2006	2007	2008
4月	14,654 (23)	11,621 (22)	12,988 (22)	13,243 (23)	12,268 (23)
5月	14,877 (22)	14,612 (22)	15,333 (22)	13,905 (21)	16,952 (24)
6月	19,623 (26)	18,677 (26)	18,289 (26)	17,394 (26)	18,789 (25)
7月	24,922 (25)	23,518 (24)	23,903 (25)	25,100 (25)	29,492 (26)
8月	962 (7)	1,984 (13)	1,098 (4)	1,916 (13)	2,237 (11)
9月	11,618 (21)	9,222 (20)	11,261 (15)	9,238 (20)	10,042 (19)
10月	17,449 (23)	11,811 (25)	17,883 (25)	18,706 (27)	19,907 (27)
11月	16,727 (21)	15,593 (22)	15,147 (21)	15,609 (21)	15,694 (23)
12月	14,049 (20)	13,013 (19)	13,265 (19)	13,208 (18)	14,453 (20)
1月	19,706 (17)	17,063 (18)	19,750 (20)	18,858 (20)	19,279 (20)
2月	3,788 (17)	3,305 (16)	2,598 (13)	2,220 (12)	3,131 (15)
3月	2,214 (17)	2,299 (18)	1,645 (18)	2,516 (19)	1,943 (17)
合計	160,589 (239)	142,718 (245)	153,160 (230)	151,913 (245)	164,187 (250)

図表 11-5 貸出冊数

	2004	2005	2006	2007	2008
和書	55,208	54,429	58,072	57,642	58,047
洋書	12,809	12,927	12,998	9,738	12,011
合計	68,017	67,356	71,070	67,380	70,058

また、2008年7月まではシルバー人材センターへの業務委託で午後9時までの開館に対応していたが、委託内容は警備を中心とした館内保全のみであり、貸出・返却等のカウンター業務は実施できなかった。そこで、2008年9月以降、専門の業者へ委託先を変更し、午後9時の閉館時間まで(レファレンスを除く)通常の閲覧カウンター業務を可能とし、サービスの向上を図っている。

さらに、図書館の利用を促進する方策としてつぎのようなことを実施している。

ガイダンス、オリエンテーション

学生が図書館を有効に活用し、多様な情報検索能力を習得して自身の学習・研究を深めることを支援するとともに、教員のサポートも目的として、年間を通じて学科、学年、授業それぞれに応じた内容のガイダンスを随時実施している。

レファレンス・サービス

図書館専任職員が毎日交代で担当し、館内資料の利用案内をはじめとして、OPAC利用方法、オンライン・データベース検索方法の指導等を行なっている。また、リサーチペーパーや卒業論文に必要な資料収集に関する相談に応じている。(図表11-6)

図表11-6 レファレンス・サービス利用状況 (2008年度)

利用者内訳		
教職員	学生・大学院生	学外者
213件	178件	384件
業務別内訳		
所在調査・事項調査	文献複写依頼・依頼状発行	オリエンテーション
172件	338件	25回

リザーブ図書制度

教員から指定された図書、授業で参考文献として挙げられている図書および利用頻度の高い図書は、リザーブ図書として1階閲覧カウンターに集め、利用の便宜を図っている。貸出期間も通常の4週間ではなく、1週間、3日間、館内利用の3種類で対応している。

購入希望図書制度

レファレンス・カウンターで学部生、大学院生からの図書購入希望を隨時受け付けている。過去5年間の購入件数は、2004年度：和書150 / 洋書193、2005年度：和書248 / 洋書235、2006年度：和書165 / 洋書182、2007年度：和書186 / 洋書87、2008年度：和書176 / 洋書173、である。

絶版・品切れ等で入手できなかった図書を除いて要望の95%以上に応じる一方で、

購入希望をもとに利用者のニーズを把握し、授業内容を考慮して周辺分野の資料の充実に努めている。

学生用就職図書コーナーの設置

2004年度より、学生生活課と協力して就職関連図書のコーナーを設けている。Extensive Reading I Collection と同様、書庫の利用が終了した後も閉館時間まで利用することができるよう、正面入口に近いオープンスペースに書架を設置している。2009年5月1日現在170冊以上を所蔵している。

Tama Academic Consortium 図書館相互利用

本学は国際基督教大学、国立音楽大学、武蔵野美術大学、東京経済大学とともにTama Academic Consortium(TAC)を組織しており、図書館相互利用においてはコンソーシアム発足当初より緊密な協力関係を維持している。特に、図書資料の相互貸借において実績を上げている。

図表11-7 図書館間相互協力利用状況 (2008年度)

国内								国外	
図書・雑誌の貸借				文献複写				文献複写	
大学図書館		その他		大学図書館		その他			
貸出	借受	貸出	借受	受付	依頼	受付	依頼	受付	依頼
435	469	0	0	290	343	0	106	0	18

なお、TAC以外の他大学との協力においては、2004年度より「国立情報学研究所ILC文献複写等料金相殺サービス」に参加したことによって依頼が容易になった一方、外部機関からの文献複写受付件数が増加する傾向が2008年度も続いた。また、上記相殺サービスに参加していない大学からの依頼も多い。(図表11-7)

(4) 学外者へのサービス

図書館の一般市民への公開は実施していない。理由は、学内には図書館に隣接して3棟の学生寮があること、1階から5階の書庫の構造が一様でなく、図書館入口に入退館システムがないために不審者の出入を完全にはチェックできないなど、主としてセキュリティの問題によるものである。

しかし、卒業生および他大学の学生・研究者の利用希望には応じており、資料の館内閲覧、複写はもとより、参考質問への回答・調査にも対応している。また、希望者には利用証(無料)を発行して館外貸出も行なっている。研究機関に所属していない研究者や一般市民に対しても、本学の創立者や歴史に関する資料の利用および参考質問、公共図書館では入手困難な学術書の利用要求に応じている。

【点検・評価】

本学図書館は他大学と比較して、学生、教職員に活発に利用されている。購入希望図書制度を通して学生の要望に沿うべく努力してきたこと、利用が集中する図書に関しては貸出期間を変更するなどの対応によって利用者の要求に応じていること、また、レファレンス担当者と閲覧カウンター担当者が協力してニーズの把握に努めるととも

に、学科、授業内容に即したオリエンテーションを継続して行ない、教員と連携した授業用リザーブ図書制度を取り入れていること等の結果と考えられる。

さらに、2006年度から和書の貸出数が増加した要因のひとつとして考えられるのは、年度当初より外部委託を実施した和書目録データ作成業務の成果である。委託の際の仕様で書誌情報中のアクセス・ポイントの充実を重要な目標とした結果、キーワード検索でのヒット率が上昇したこと、さらに受入から利用開始までにかかる時間が短縮され、書評欄など各種メディアで紹介された図書が時間を経ずして図書館のNew Booksコーナーに展示されるようになったことなどが挙げられる。

利用環境の改善として課題となっているのは、書庫の資料配架スペースの確保とホームページの充実である。図書館およびAVライブラリーの情報を提供するホームページについて、現在は資料検索を中心としたシステムが稼動しているが、利用方法等についての情報提供が少ないため、学外からの基本的な問合せも多い。

また、図書館とは別に「AVライブラリー」を挙げているように、現在、図書・雑誌等に代表される冊子体資料と、その他のメディアからなる視聴覚資料とで利用環境が二ヶ所に大きく分かれている点は、利用者にとって最善とは言えない。AVライブラリーが5号館に設置された理由は、授業（教室）に近接して関連の語学資料を配置するということであったが、メディアの違いによらず、同一施設内で横断的に資料を利用できる環境を要望する声も少なくない。

【改善方策】

限られた書庫のスペースを有効に利用するための対策として、新聞・雑誌（主として週刊誌）原紙を順次マイクロフィルムに置き換え、原紙を廃棄する措置を講じている。同時に、マイクロ資料ができるだけ容易に利用するための設備として、従来の単機能リーダープリンターに加え、2006年度および2007年度に最新のデジタルイメージ・プリンターを購入した。同機はPCと接続することによって様々な拡張機能を持ち、資料の多角的な利用に役立つ設備である。今後も順次、整備を進める予定である。

図書館・AVライブラリーのホームページについては、2009年度中の開設を予定している。予算措置もされ、現在仕様の確定等の準備を進めている段階である。

なお、メディアの違いを超えた横断的な利用をひとつの施設内で実現することは現状では困難である。これについては、2013年以降に予定されている図書館建築計画を待つことになる。

B. AVライブラリー

【現状説明】

AVライブラリーは1990年度に様々な視聴覚メディアの活用に対応した教室群からなる5号館（AVセンター棟）の完成を機に、視聴覚センターとともに開設された。語学研究所（視聴覚センター前組織）・テープライブラリーならびに図書館で所蔵していた視聴覚資料の移管を受け、特に約60言語を数える語学教材を中心に、詩・文学作品の朗読、講演、ニュース、映画・演劇、芸術全般、歴史、ドキュメンタリー、保健体育な

ど幅広い視聴覚資料の収集に努めるとともに、授業利用、学生のホームワークや自学自習に応えたメディア視聴設備を有している。また、各ブースではCNN, BBC, ディスカバリー・チャンネルを常時視聴することができる。設備は、図表11-8のとおり。

図表11-8 AVライブラリー視聴覚設備一覧

ライブラリー		メディア装置類						提示装置 M-TV	備考
		VTR	DVD	LD	CD	MD	CTR		
グループブース	A	1	2	1	1	1	1	1	
	B	1	1	1	1	1	1	1	
ペアブース	C,D	2	2	2	2	-	2	2	
	E,F	2	2	2	2	-	2	2	
	G,H	2	2	1	2	2	-	2	
AV学習ブース	I 1~4	4	-	-	-	-	4	4	LLカセットあり
	I 5~8	4	-	-	4	4	4	4	LLカセットあり (I8は同時通訳用)
	I 9, I 11~15	6	-	-	-	-	6	6	LLカセットあり (I9は同時通訳用)
	I 10	-	-	1	1	-	1	1	LLカセットあり (同時通訳用)
個人ブース	J 1~6	6	6	-	6	-	-	6	
	K 1~6	6	6	-	6	-	-	6	
	L 1	1	1	-	1	-	1	1	
	L 2~6	5	5	-	5	-	5	5	
	M 1~6	6	6	-	6	6	-	6	
	N 1~6	-	6	6	6	-	-	6	
検索PC		-		-		-	-	-	5台
	合計	46	39	14	43	14	27	53	

(VTR: Video Tape Recorder, DVD: Digital Versatile Disk Player, LD: Laser Disk Player, CD: Compact Disk Player, CTR: Cassette Tape Recorder, MD: Mini Disk Player M-TV: Monitor Television)

(1) 開館時間 授業期間中 [月～金] 9:00～19:30 (貸出受付は18:30まで)
授業期間外 [月～金] 9:00～16:30 (貸出受付は16:00まで)

(2) 貸出点数と期間 オーディオ系資料3点までとその付属テキスト：1週間
春期、夏期、冬期休暇の際には長期貸出を実施する。オーディオ資料とその付属テキストについては貸出資料数制限を解除する。

(3) 利用状況

2002年度から毎年増加していた利用者数が、2005年度は一旦減少した。しかし2006年度から授業期間中の利用時間を午後7時30分まで延長し、授業終了後の視聴環境改善に努めたことで、再び利用者が増加することとなった。また、館外貸出資料件数も2004年度をピークに減少しているが、これは資料の更新に遅れがあったことが一因と考えられたため、2006年度後期以降積極的に新しい資料の導入を図っている。(図表11-9)

図表 11-9 A V ライブライリー利用状況

	2008 年度			2007 年度			2006 年度			2005 年度		
	開室日数	利用人数	利用時間									
4月	21	2,139	2,389	20	2,448	2,617	20	2,356	2,472	20	2,112	2,115
5月	20	3,614	3,994	18	2,961	3,317	19	3,634	3,921	18	3,501	3,611
6月	21	3,480	4,240	21	3,583	4,086	22	3,604	4,069	20	4,133	4,277
7月	22	2,561	3,471	21	2,226	2,662	20	2,021	2,433	20	1,897	2,216
8月	10	98	153	13	135	200	12	76	114	12	88	133
9月	18	1,085	1,461	18	1,431	1,728	19	1,486	1,781	19	1,436	1,597
10月	22	3,967	4,796	23	4,156	4,848	21	3,446	3,818	20	3,341	3,416
11月	19	2,814	3,534	20	2,820	3,478	19	2,525	3,036	19	2,647	2,861
12月	16	2,400	2,923	15	2,217	2,749	16	2,560	2,981	16	2,006	2,152
1月	16	1,327	2,771	18	1,517	2,247	17	1,150	1,559	15	840	1,104
2月	16	308	564	15	256	455	15	268	437	17	265	456
3月	18	148	246	18	147	264	19	128	227	20	167	291
合計	219	23,941	28,650	220	23,897	28,650	219	23,473	26,847	216	22,433	24,228

【点検・評価】

A V ライブライリーでは、これまでメディアの変化に積極的に対応し、時代に即した教育・研究環境を整えてきた。しかし、近年は特に映像・音声とともにアナログからデジタルへの転換期にあり、メディア媒体および装置類の著しい変化に充分対応できていない。

【改善方策】

設備面では、2011年度以降にブース設備の更新を行ない、現在のアナログを中心とした視聴環境からデジタルに対応した設備へ変更し、メディアや配信された高画質映像に対応できる表示装置とする予定である。

2. 情報インフラ

1) 学術情報の処理・提供システムの整備状況、国内外他機関との協力状況

【現状説明】

学術情報の処理・提供システムに関しては、1987年より洋書のデータベース化を開始していたが、1996年10月に図書館システムを導入して図書館およびAVライブラリー資料のOPAC公開を開始し、さらに2004年8月に図書館情報システムの全面的なリプレイスを実施して、国立情報学研究所（NII）の多言語目録・新CAT/ILLオープンシステムへの対応を完了した。それとともに、利用者用・業務用とも館内すべての端末からインターネット経由で外部データベース等への接続が可能となり、教育・研究を支援する態勢の整備が進んだといえる。また、2006年3月にはシステム・バージョンアップによってOPACの機能を一新し、Webから個人認証でログインすることができる個人ポータル機能（マイライブラリ）を付加している。

資料の書誌および所蔵情報のデータベース化については、図書館にあっては約97%、AVライブラリーではほぼ100%終了している。

図書館では、新規購入図書の整理と並行して、1996年（洋書データについては1988年）の図書館システム導入以前に受け入れた図書の書誌・所蔵データの遡及入力を行なっていたが、データベース化された図書資料総数は2009年3月末現在で34万件を超えており、開架書庫および閲覧室内に配置されている資料のデータベース化をほぼ終了している。

AV資料については、利用者の多角的な検索に対応するため、2005年よりアクセス・ポイントとなる書誌データ項目の充実に着手している。

<図書館およびAVライブラリー情報関連ネットワーク機器整備状況>

(2009年5月現在)

図書館	利用者用検索端末	WindowsXP PC 24台
	業務用端末	WindowsXP PC 20台
	業務、検索サーバ	Solaris 2台
	業務用APサーバ	WindowsServer 1台
AVライブラリー	利用者用検索端末	WindowsXP PC 5台
	業務用端末	WindowsXP PC 5台
	業務用APサーバ	WindowsServer 1台

国内他機関との協力状況は、システム導入当初よりNIIの共同分担目録および所在情報サービス(NACSIS-CAT)、相互貸借システム(NACSIS-ILL)に参加するとともに、NII学術コンテンツ・ポータル(GeNii)も利用している。さらに、国際基督教大学、国立音楽大学、武蔵野美術大学、東京経済大学とともに多摩アカデミック・コンソーシアム(Tama Academic Consortium)を組織し、緊密な協力関係を築き、相互利用を実施している。

国外機関では、2万タイトル以上の学術雑誌と10万タイトル以上の学会報告集を擁す

るBritish Library のinside-web と契約し、外国雑誌、学会報告等の記事の取り寄せを可能としている。

さらに、システム・リプレイスを機にZ39.50サーバーを公開して国内外の研究機関との横断検索を可能にするとともに、2005年からはNIIへの夜間所蔵自動登録を開始し、本学学術情報の発信に努めている。また、VPNの整備によって、これまで学内での利用に限られていた多くのオンライン・データベースに学生、教職員が自宅からアクセスすることも可能となっている。

2) 学術資料の記録・保管について

【現状説明】

図書館システムのメンテナンスは、ほとんどの場合サポートセンターからのリモートアクセスで実施されているが、定期的なシステムバージョンアップについてはオンラインで支障なく行なわれている。

本学の学術情報は、図書館内に設置された業務サーバに蓄積されており、すべてのデータは毎日の夜間処理によってバックアップがとられるとともにUPSも設置されているため、これまでデータが損なわれたことはない。

【点検・評価】

2004年の図書館システムリプレイスから5年が経過し、ソフトウェア構成上、新機能の追加が必要になっているが、ハードウェアにも故障が目立つようになってきた。さらに業務および検索サーバにおいては、ハードウェア保守契約の期限が2010年8月末に迫っている。

資料のデータベース化については、数学科・情報科学科図書室に別置されている図書のうち、1987年以前に受け入れた約1万冊の数学分野の洋図書の書誌・所蔵情報がカードカタログ形式のままで残っている。

【改善方策】

図書館システムの更新を2010年中（遅くても2011年）に実施するために、現在複数システムの比較検討に入っており、2010年度予算として申請している。

数学分野の洋図書のデータベース化については、2011年度以降、図書館システムリプレイス完了後に本格的に遡及計画を開始する。

3. 大学資料の展示等（図書館本館2階 津田梅子資料室）

【現状説明】

(1) 資料収集とレファレンス

津田梅子資料室は、津田梅子およびその周辺の人びとに関する資料、女子高等教育と日米の女子教育関係史資料、教科書を含む日本の英学史資料、本学の歴史と本学卒業生に関する資料などを中心に収集している。収集所蔵している各種資料（図書、雑誌、書簡、写真等）は日本史や教育史の研究者などにとって貴重な一次資料となって

おり、卒業生のみならず他大学の研究者、出版社、新聞・雑誌、テレビ関係、そして小学生から大学院生および留学生までをも含めた広い層に対して、資料提供、レファレンスを行ない、学校教育、社会教育に貢献している。

2000年度に制作されたドキュメンタリー映画『夢は時をこえて - 津田梅子が紡いだ絆 -』の制作時には、資料提供、撮影協力、シナリオ内容調査、校正など多方面から協力し、学外では各地の自治体、団体での公開、学内においては授業での上映、新入生オリエンテーション、オープンキャンパス、塾祭等での上映を支援している。2003年には映画の日本語対訳シナリオをブックレットの形で作成し、ビデオに付して外国の日本研究を持つ大学、教育機関、日本センター等への送付を開始した。

(2) デジタルアーカイブ

これまで一般公開することが難しかった貴重資料をより多くの研究者ならびに一般の方々が参照できるよう、創立110周年記念となる2010年春よりWeb上にコンテンツを公開することを目指して、2008年より所蔵資料のデジタルデータ化を開始した。2009年度中にアーカイブシステムの決定とテストを行ない、並行して資料のデジタル化を進め、コンテンツを追加する予定である。

(3) 企画展示

一般にも公開されている展示スペースでは、年間を通して平日9:00～16:00に企画展示を行なっている。観覧は無料である。また、学内オープンキャンパス企画と協力して、進学相談会、保護者のためのツアーなどが実施される場合は土・日・祝日、ホーム・カミング・デーなどの休日にも開室している。

学外からの観覧者は小学生から一般市民まで幅広い層に及び、さらに授業の一環として展示コーナーを利用する本学教員もあり、そのほかにも多くの在学生が展示コーナーを観覧していることから、本学の創立理念と目的、ならびに日本女性の近現代史を学ぶ場としての役割も果たし、本学の特色を活かした形で学内の教育に資する空間ともなっている。

- 2001年10月～2002年8月「岩倉使節団派遣から130年 最初の女子留学生たち 大山 捨松、瓜生繁子、津田梅子」
- 2002年8月～2003年8月「女性の教育と地位向上に捧げた藤田たきの生涯」
- 2003年8月～2004年9月「日本女性に留学の機会を：津田梅子が創設した日本婦人米国奨学金」
- 2004年10月～2005年9月「津田塾大学星野あい記念図書館建設から半世紀：女子高等教育のパイオニア星野あいが拓いた道」
- 2005年10月～2006年9月「科学する女性たち：津田塾大学数学・情報教育のあゆみ」
- 2006年10月～2007年9月「メディアと高等教育：伝統と革新の軌跡」
- 2007年10月～2008年9月「アナ・ハーツホンと津田塾大学：創設期を支えたあるアメリカ女性の献身」
- 2008年10月～2009年9月「Principals：塾を導いた学長たち」

2009年10月～2010年9月「津田塾生の今と昔」

【点検・評価】

企画展と連動する形で、シンポジウムまたは講演会も行なっている。各界で著しい業績をあげた方々あるいは卒業生を中心としたパネル・ディスカッションや講演は、本学の歴史と教育内容を再確認し、これから女性教育への提言を発信する場ともなっている。学生への教育的効果が大きい上に、一般にも公開されており、大学の所有する知的財産の開放としても評価されている。ただし、これまで限られたテーマの企画展示ばかりではなく、本学の創立者あるいは校史を紹介する常設展を望む声は少なくなかった。

【改善方策】

本学の創立者あるいは校史を紹介する常設展の要望を受けて、2006年度からは展示スペースの一角をそのコーナーにあて、「塾の歴史を辿る」と題した展示を開始した。2008～2010年の3年間には創立110周年記念として、創立者および歴代学長、学生を中心とした大学史に関する連続企画展を開催している。

所蔵資料の公開に関しては、特に創立者とその周辺の個人の書簡群について、内容の精査と整理を進めることが必要とされている。これまでにも順次読み解きながら整理してきたが、100年以上前の英文自筆文書であるため非常に解読しにくいこと、さらに記されている紙の劣化が危ぶまれることから、スピードアップを図れないのが現状である。資料のデジタル化を進め、デジタル・アーカイブを充実させることによって参照を容易にし、内容の精査を進めて公開の範囲を広げてゆく計画である。